

【2026年2月18日 灰の主日 夕礼拝 マタイ6章1—6節、16—21節】

「あなたの富のあるところに、あなたの心もある」

私たちの額に塗られた灰は、静かに私たちに語りかけます。

「あなたは塵であり、塵に帰る。」

この言葉は、私たちが脅すためではありません。

現実を見つめさせる言葉です。どんなに強い国も、どんなに大きな集団も、

永遠に続いたことはありません。力ある者が近隣を滅ぼし、勝利を誇る。

しかしその栄華も、やがて終わります。私たち自身も、限りある命を生きています。

主イエスは言われました。

「あなたの富のあるところに、あなたの心もある。」

富とは、お金だけではありません。地位、名誉、安全、自分を守ってくれる仲間、

自分の正しさ。私たちの心が、どこに結びついているのか。それが問われています。

賛美歌 455 番はこう始まります。

「敵をほろぼす 王とことなり 主イエスは民を 救いたまえり。」

この世界の王は敵を滅ぼして勝利します。

しかし主イエスは違います。

主は敵を倒して勝ったのではありません。

敵のために死なれた王です。十字架の上で、主は祈られました。

「父よ、彼らをお赦してください。」

賛美歌は歌います。

「十字架も恥も いといたまわず 死にたまいしは 主の勝利なり。」

十字架は敗北のしるしでした。しかし神は、それを勝利に変えられました。

灰の主日は問いかけます。

あなたの心はどこにありますか。この世の力ですか。安全ですか。

それとも、十字架の主のもとですか。

この地上のものはすべて終わります。私たちも終わります。

しかし終わりは絶望ではありません。

種は土に埋もれ、姿を失います。けれどそこから芽が出ます。

主イエスも墓に葬られました。しかし三日目に復活されました。

だから私たちは、終わりを受け入れることができます。

罪を悔い改め、この世の富に結びついた心を、主に差し出すことができます。

「罪あるものの 友なるイエスよ われらの祈り 聞きあげたまえ。」

灰の主日から四旬節が始まります。

終わりをみつめる四十日。しかしそれは、復活の朝へ向かう道です。

敵を滅ぼす王ではなく、敵を救う王に従いながら、この歩みを続けてまいりましょう。

主イエス・キリストよ、私たちはときに、「外国人」や「よそ者」、自分と「違う」人に出会うとき、不安や戸惑いを覚え、知らず知らずのうちに距離を置いてしまいます。

どうかその弱さをお赦してください。敵を滅ぼす王ではなく、敵のために祈られた主よ、

私たちの心を強さではなく、赦しと交わりに結びつけてください。

恐れに支配されるのではなく、十字架の愛に導かれて歩むことができますように。

この教会が、違いの中にあっても共に座り、共に祈る場所であり続けますように。

イエス・キリストの御名によって アーメン。

【2026年2月18日 灰の水曜日 黙想】

私たちは無意識のうちに、

「敵を滅ぼす王」の力に安心を求めているのでしょうか。

「外国人」と聞くと、

どこか遠い存在のように感じていないのでしょうか。

「よそ者」という言葉に、

少しだけ身構えてしまうことはないのでしょうか。

自分と「違う」人に出会うとき、

心の中でそっと距離を置いてしまうことはないのでしょうか。

それは、だれかを傷つけようとする思いではなく、ただ不安だからかもしれません。自分の暮らしを守りたいからかもしれません。

私たちは皆、安心できる場所を求めています。けれど主イエスは、敵を滅ぼして安心をつくる王ではありませんでした。

主は、よそ者と呼ばれた人と食卓を困罪人と呼ばれた人に近づき、

十字架の上で祈られました。

「父よ、彼らをお赦してください。」

教会は、同じ人だけが集まる場所ではありません。

違いがあっても、共に座り、共に祈ることのできる場所です。

恐れがあってもよい。戸惑いがあってもよい。それでもなお、

十字架の主のもとに共に立つ場所。

それが教会ではないでしょうか。

「あなたの富のあるところに、あなたの心もある。」

私たちの心が、強さや安心だけに結びつくのではなく、

赦しと交わりに結びつきますように。

灰の主日、自分の弱さを認めながら、

敵を滅ぼす王ではなく、敵のために祈られた王に、

心を向けて歩みたいと思います。アーメン